

1) セツブンソウ＝節分草

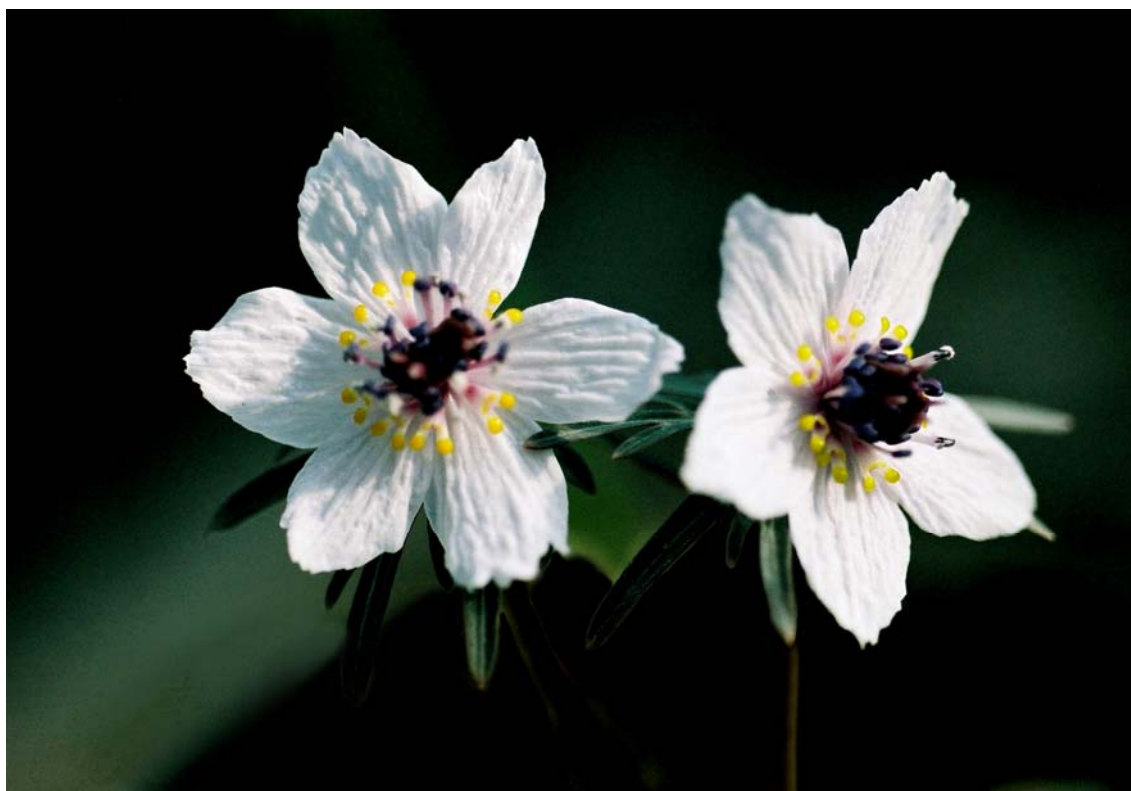
セツブンソウはキンポウゲ科の多年草で、関東以西の山野に自生し、2～4月頃山あいの木陰でひっそりと白い花を咲かせる。学名は『*Eranthis pinnatifida*』で、**属名**(最初の単語)は春の花を意味しており、**種小辞**(属名の形容詞)は葉の形状を説明している。和名の由来は節分のころに花を咲かせるためである。しかし我々が花だと思っている花卉は、実は蕾の時から花卉を守る役割を果たしてきた萼片で、本当の花卉は萼片の中に退化して、雄蕊に混じって黄色い蜜槽と呼ばれる痕跡をとどめるだけになっている。このように花卉だと思っているものの中には、萼片だったり、苞だったりすることもしばしばである。(05-01-06 シュウメイギクの項参照)セツブンソウの萼片は5枚でアジサイの萼片は4枚、これを花として見ている。一般的に**双子葉植物**の花卉数は5枚もしくはその倍数で、**单子葉植物**の場合は3枚もしくはその倍数といわれている。このほか大根や小松菜のような十字架植物、さらにはケシ科の植物など花卉の数が4枚というのものもある。花卉の数が7枚とか8枚だったら、これは花卉ではなくて**萼片か苞**であることを疑ってみるとよい。たとえば花水木は4枚、クレマチスは6枚か8枚で、ともに萼片である。こんな植物の法則性を知った上で花との対話を続けていると、さまざまな疑問や、また長い間の人間と植物の関係に、遠く思いを馳せることができるように思える。

ところで我々日本人は、奇数を縁起のよい数と捉える傾向がある。中国では奇数が『陽』で偶数が『陰』と考える学説があり、奇数の重なる暦はすべて吉日になっている。1月1日はお正月で、3月3日と5月5日はお節句、7月7日は七夕さま、9月9日は重陽の節句である。人間が進化する過程で、物を考えるようになったころ、今からおおよそ10万年前、我々人間の祖先はいったい何を見て美しいと感じたのであろうか。その答えは多分『花』だったと思う。そして現在のように改良品種がなかった時代、十字架植物などの一部を除けば、多くの花は3弁もしくは5弁の花びらであったと推定できる。原始人は3と5という数に美を見いだしたのだろう。もとより1はすべての始まりであるから1,3,5と奇数が続く。となるとその延長である7が仲間入りし、やがて9が続いてくる。これは単なる想像に過ぎないが、花と人間との長い歴史を振り返るとき、そこにはさまざまな『縁』があったことが想像できるのである。

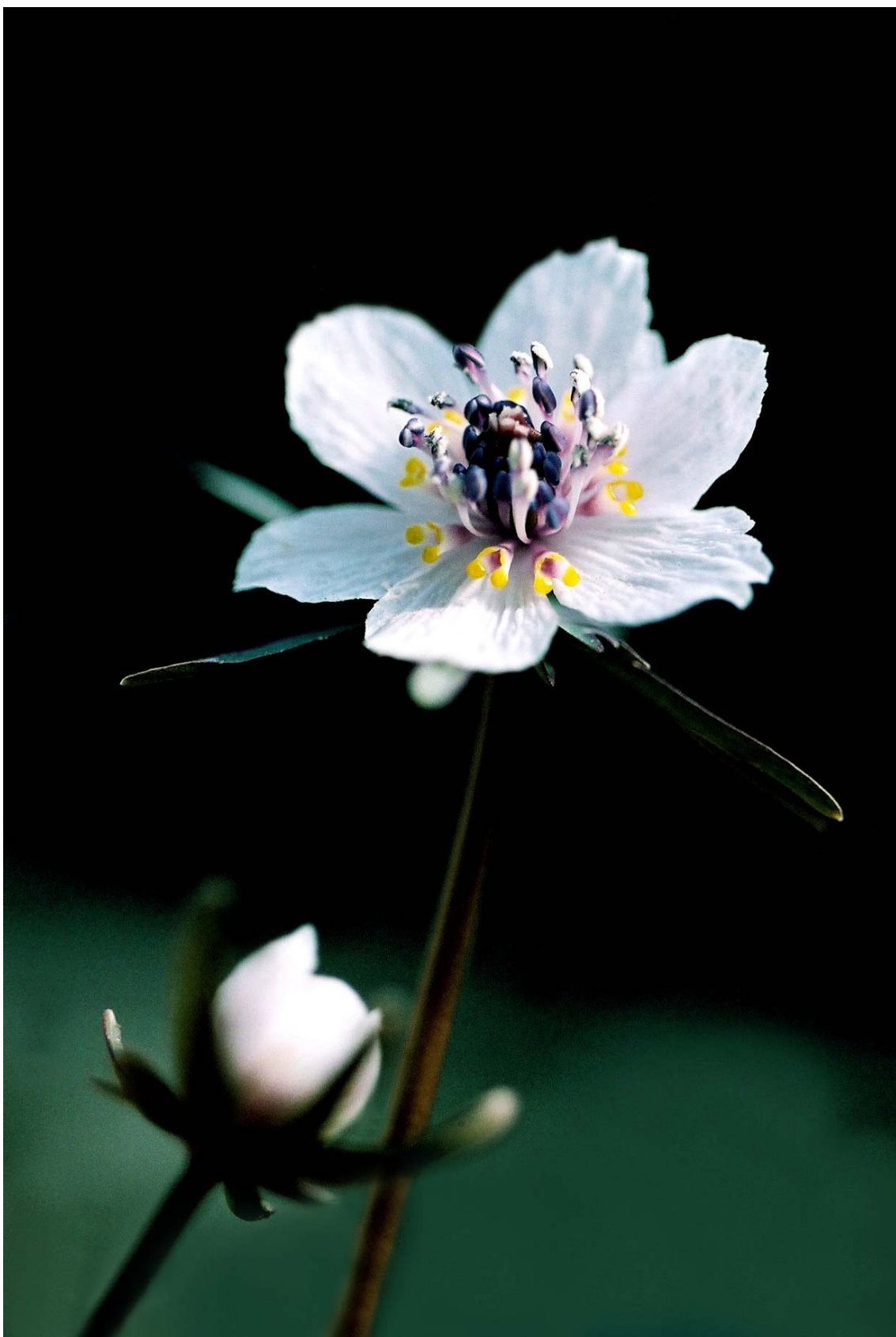
さて節分草の育てかたである。まず東北以北では手をつけないほうが無難である。それに鉢で作るのも失敗する可能性が高い。露地で植えるときも大きな庭で通風もよく、落葉樹が繁って日陰になるところがほしい。そして山野草の常としてまず水捌けがよいこと、水持ちがよいこと、腐葉土が毎年蓄積されること、午前中に陽が当たり、午後は日陰になること、こうした条件を満たすことが必要である。しかしセツブンソウは石灰岩地に多いところから、桐生砂、赤玉土、腐葉土を混合して用土を作り、適宜石灰を入れることも忘れてはならない。あとは常に自然環境と同じ条件を再現する努力をすることである。埼玉県小鹿野町には節分草の群落がある。



セツブンソウの花、埼玉県小鹿野町には節分草の大群落があり、2月上旬から3月上旬にかけて花を楽しむことが出来る。また近くにはフクジュソウ園もある(埼玉県小鹿野町節分草園)。



セツブンソウの花、フクジュソウとともに春を告げる花である(埼玉県小鹿野町節分草園)。



セツブンソウの花が咲くと、どんなに寒い日があっても、春は近い(埼玉県小鹿野町節分草園)。



植木鉢の中でまとまって咲いた節分草。ここまで増えるだけで5年ぐらいかかる。



セツブンソウの花。数輪の花がかたまって咲くことはめったにない。多くの花の中から丹念に探し出して、小石で少し角度を調整してやっと撮影できた(埼玉県小鹿野町節分草園)。



黄花セツブンソウの花、野生のものを見ることはまずない(栽培品)。



黄花セツブンソウ、美しい黄色の花だが、この花に限っては白い花の方が、なぜかふさわしい気がする。寒さの中で楚々と咲くところがいいのだろう(栽培品)。



セツブンソウの若い果実、熟した頃に播種すれば確実に増やすことが出来る。

[目次に戻る](#)